

梯久美子 優秀審査員賞

愛知県長久手市

都島 彩規子

スウエター

祖母は、八歳でカナダに渡った。鮭獲り漁船に乗るためカナダにやって来た祖父と出会い、二十歳で結婚して日本に戻るまで、バンクーバーで過ごしたらしい。祖母はカナダの話を好まなかったから、どういう生活をしていたのかは分からない。けれど、祖母は所々に異国の匂いを残す人だった。

ある日、小学生だった私に祖母はこう言った。「さきこ、おばあちゃんのスウエターどこけ」私はびっくりにした。スウエターなんていう言葉は知らなかった。「おばあちゃん、スウエターって何」そう聞くと、祖母は「スウエターはスウエターよ」と答えた。母がそれはセーターのことだと教えてくれた。

スウエター、なんて美しい言葉。セーターとはえらく違う。最初に少し漏れる空気「す」、次に唇を軽く閉じて横に開く「うえ」、そして最後に舌を巻いて出す「たー」祖母が話そうとしなかったカナダの破片。知りえなかった世界が、開かれた気分だった。

大学を卒業した後、私はバンクーバーに留学した。下宿先の前は八重桜が何本も植えられていて、強い風が吹くと桜がくるくると円を描いて散って行く。無性に桜吹雪の中に入りたくなって、私は外に出た。四月だというのに寒かったから、部屋着のセーターを掴んで羽織った。通りに出ると、見知らぬ人がこう言った。

“Nice Sweater!”

「おばあちゃん」私は息を呑んだ。祖母の最期、弱りゆく祖母を見たくなくて、目をそむけ、祖母の死をただ、待った。「おばあちゃん、おばあちゃん、おばあちゃん」私は何度も呟いた。むせ返るような桜の中で、息ができなくなった。こんなにも祖母を愛していることを、なぜ私は言わなかったのだろう。立ち尽くして、泣いた。

スウエター、今も時々、意味もなく言うことがある。スウエター、なんて美しい言葉。

スウエター、祖母が私に遺してくれた、私だけの宝物。